様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５８００７７

研究課題名（和文）9、10世紀東アジアにおける宗教儀礼と文学芸能発展に関わる研究の新展開

研究課題名（英文）Exploratory Research on Religious Observance and Literary Development in East Asia in the 9th and 10th Centuries

研究代表者
荒見　泰史（Arami, Hiroshi）

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：３０３８３１８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、9、10世紀東アジアにおける宗教儀礼の変化とそこに生まれる多様な芸能と文学を検討する為の基礎的な研究環境づくりを目的とする。そのために日本史、敦煌学、日本文学、民俗学、仏教学などの専門領域からメンバーを集め、自由な議論ができる環境のなかで敦煌の唱導資料、願文資料と日本資料を比較しつつ討論を繰り返してきた。3年間の具体的活動としては、A研究者が個別で敦煌文献や日本残存資料から関連資料を収集、整理する、B小規模の研究集会を開き、収集した資料を紹介し議論を通じて多角的に検討を加える、の２点を中心とし、複数回の国際研究集会主催及び共催を通じてそのような議論を進めてきた。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this three-year project is to prepare a foundation for reviewing the changes in religious observance in East Asia in the 9th and 10th centuries, and discuss art and literature created by these changes. For this purpose, scholars from specialized areas including Japanese history, Japanese literature, Dunhuang studies, folklore, and Buddhology gathered and discussed these themes by comparing the historical archives of Gan-mon (Dunhuang prayer sentences) and Japanese materials. To date, our project has obtained two major outcomes: A collected and organized the Dunhuang historical materials and the Japanese historical records, and B organized an international conference, where he presented the collected materials and participants examined them from diverse perspectives.

研究分野：人文学

キーワード：敦煌　法会　東アジア　次第書

１．研究開始当初の背景

研究が細分化されている今日の研究環境においては、領域を跨ぐ情報の収集と議論が重要度を増しつつある。しかし、敦煌文献の情報は日本研究者には受け入れられやすくなりつつあるが、逆に日本古抄本資料に関しては中国研究者には存在すら知られていない場合があり、相互に理解しあい議論をすすめることには一定の難度があった。

そこで、敦煌文献に見られる唱導資料と類似する願文、次第書、因縁譚などの日本残存資料などで未整理のものや入手困難な資料を順次とりあげ、漢学の国際的基準に合わせた文字と標点符号による翻刻整理と電子資料化を行い、比較研究を促進し、またその資料を各国研究者の間で議論することが、本研究領域では重要な意味があると思われた。

２．研究の目的

(1)本研究は、東アジア各国に残される願文、説話資料を通じて、9、10 世紀における宗教儀礼の変化とそこに生まれる多様な芸能と文学を、広く東アジアの面でとらえなおし、中国、日本、朝鮮半島で起こった事象について総合的に比較研究を進めるための研究環境づくりを目的とした。その基本的な作業方法は、とくに敦煌文献や日本古抄本、韓国残存書籍の中で類似性が指摘される関連資料などを中国学の国際的基準にあわせた翻刻、電子資料化を体系的に行い、資料を国内外に向けて発信すること、及び国内各方面の研究者ばかりではなく海外研究者、とくに中国、韓国の研究者との定期的な意見交換の場を設け、それらの資料の重要性に対する評価、検証を継続的に行うこと、などであった。

(2) 本研究と同様の考えは、日本中世の研究、法会の研究、東アジアの説話研究、通俗文学の研究など、様々な領域の研究者がすでに重要性を指摘してきた研究と言える。しかし、今日までの研究においては、①領域を異にする敦煌文献と日本古抄本を比較すると言う点、②資料を扱う研究者の属する領域も歴史、文学、民俗、宗教など異なると言う点、③日本人研究者ばかりではなく中国、韓国研究者との交流を行わなければならないなど使用言語上の問題点もあり、これまで成果を挙げることは難しいとされてきた。

研究代表者はこれまで中国で博士課程、ポストドクター時において同研究方面に携わり多くの中国研究者、韓国研究者と交流をしてきた経験があり、そうした経験を生かして例えば第１回東アジア宗教文献国際研究集会（2011 年 3 月 15、16 日、筑波大学開催）、第２回東アジア宗教文献国際研究集会（2012 年 3 月 16～18 日、広島大学開催）などを筑波大学近本謙介氏、本井牧子氏、国立歴史民俗博物館松尾恒一氏、明海大学遊佐昇氏、台湾南華大学鄭阿財氏らと共催し、京都府立大学上島享氏、東京大学蓑輪顕量氏、浙江師範大学張涌泉氏、四川大学何剣平氏、国立政治大学楊明璋氏、韓国比較民俗学会尹光鳳会長など多数の協力者に支えられ、すでに申請者周辺においては同研究を推進する基礎的環境は整っていた。そしてそれらの会議でもすでに日中韓における資料を提示し合い、各国における研究を補い得る可能性を十分議論することができたのである。

そこで本研究ではそこから更に一歩進め、とくに日本の埋蔵資料に見られる中世の願文資料、説話資料を初めとして具体的な資料に対して翻刻整理、電子資料化を進め、敦煌資料と比較しつつ議論を更に活性化させていきたいと考えた。またそうした日本資料の整理、電子化作業には中国、台湾において徐々に整理規範化されつつある漢学研究の標準的なスタイルによる標点符号と注釈により、広く世界の研究者が利用しやすい形式に纏めることが必須であるが、そうした点については浙江師範大学張涌泉氏や四川大学何剣平氏の研究グループとの共同作業によって解決しえた。さらに、本研究の中心的作業となる上記のような資料整理作業や、様々な言語環境、研究領域の研究者による議論とすり合わせは、参加する若手研究者、学生にとり重要な作業となるが、そのような作業の過程は、次代における同研究の発展を支える人材育成という点でも有効と考えた。

(3)本研究では、資料面、学術交流面の 2 点での成果が期待できた。①資料面においては、日本資料を徐々に漢学研究の体裁に合わせて翻刻紹介していくことによって、日本資料の状況が領域を超えて周知されることになる。例えば申請者がかつて遂行していた「敦煌文献中にみられる唱導資料の総合的研究」（2010 年度～2014 年度科学研究費補助金基盤研究（Ｂ））による敦煌資料との比較研究も容易に促進されることになると考えられた。また、その敦煌の唱導資料研究に携わるのと同じ研究グループが共同作業によって日本資料を同時に扱う事によって、より厚みのある綜合的な比較研究が可能となると考えられた。②学術交流面について言えば、こうした綜合的な比較研究と、それを通じた研究集会による議論の過程を長期的に経ることにより、たずさわる若手研究者の育成にもつながり、将来的には中世の東アジアを広く考える、領域を超えた研究分野に成長する可能性もあった。そのような研究領域が重要でありかつ今日求められていることについては上にも示した通りである。

３．研究の方法

本研究は、日本、中国、台湾、韓国の研究者と意思疎通を図りつつ、共同で日本古抄本の整理翻刻作業と敦煌文献の比較研究を行うのが眼目である。その作業の中心となるのは以下の 2 点である。

①日本古抄本など埋蔵資料の翻刻整理を、『正続本朝文粋』などの表白、願文、説話類から順次手掛けた。翻刻作業は広島大学のグ

ループで行うほか、経験の豊富な浙江大学張涌泉氏のグループ、四川大学の研究グループの協力によって質量ともに高い作業が可能となった。そうした作業の段階から海外研究者と共同で行うことによって、相互理解が進んだと考える。

②敦煌の宗教儀礼文献、講唱文学研究に関しては、中国浙江大学の張涌泉氏、温州大学の王小盾氏、四川大学の何剣平氏、台湾南華大学鄭阿財氏、国立政治大学の楊明璋氏らの研究者やグループが中国、台湾における中心的研究者であり、日本の中世研究のグループとともに継続的な意見交換のなかで共通認識を模索してきた。相互の連絡は電話やE-mailなどの通信機器によるほか、国際研究集会などの場で意思の疎通を図る。また必要に応じて個別に相互訪問して相談などをおこなった。

各年度計画の基本的な作業手順は以下の通りである。

①テキストの選定（研究代表者）
↓
②翻刻・注釈予備作業（研究代表者及び大学院生等の研究協力者）
↓
③中国研究者とのすり合わせ、議論の提起（研究代表者及び張涌泉、何剣平氏等）
↓
④日本研究者とのすり合わせ、議論の提起（研究代表者及び日本の研究協力者）
↓
⑤翻刻・注釈完成作業（研究代表者及び大学院生等の研究協力者）
↓
⑥小冊子の印刷製本、及び討論会参加者への配布（研究代表者）
↓
⑦研究会開催、討論により意見の集約（研究代表者及び研究協力者全体）

４．研究成果

期間内に開催した代表的な会議としては以下のような6件の国際研究集会、シンポジウムがある。

①国際研究集会『東アジアの宗教儀礼－信仰と宗教の往還』（名古屋大学、2014年12月13日、14日）
②『敦煌学国際学術研究会in京都』（京都大学、2015年1月29日、30日）
③広島大学、首都師範大学研究与協同創新学術研討会『東アジア世界とシルクロードの縁』（2015年7月30日）
④国際研究集会『法会と空間』（京都大学、2015年10月3日、4日）
⑤『玄奘フォーラム』（『東アジア宗教文献国際研究集会』と共催、2015年12月12日、13日）。

なお、これらの会議で議論されてきた内容は一部出版を用意している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　16　件）

1. 荒見泰史、「敦煌本『韓朋賦』より見た「韓朋」故事の展開」、『林雅彦教授退職記念論集』、査読無、方丈堂出版、2016年、607-634頁
2. 荒見泰史、「敦煌唱導資料の綜合的研究総序」、『敦煌写本研究年報』、査読有、第10号、2016年、169-176頁
3. 荒見泰史、「浄土五会念仏法事と八関斎、講経」、『シルクロードと近代日本の邂逅』、査読無、勉誠出版、2016年、191-228頁
4. 荒見泰史、「唐代仏教儀礼及其通俗化（下）」、『アジア社会文化研究』、査読有、第16号、2015年、25-45頁
5. 荒見泰史、「仏教儀礼の構造と文体」、『敦煌写本研究年報』、査読有、第9号、2015年、19-38頁
6. 荒見泰史、「シルクロードの敦煌資料よりみる中国の来世観」、『アジア遊学』、査読無、11月号、勉誠出版、2015年、18-54頁
7. 荒見泰史、「九、十世紀中国における斎会の隆盛と十王信仰」、『東アジアの宗教文化――越境と変容』、査読無、岩田書院、2014年、271-288頁
8. 荒見泰史、「敦煌の仏教儀礼と講唱文学――P.2091『讃釈文』、『踰城日文』を中心として」、『東方学研究論集［日英文分冊］』、査読有、臨川書店、2014年、34-45頁
9. 荒見泰史、「唐代仏教儀礼及其通俗化（上）」、『アジア社会文化研究』、査読有、第15号、2014年、21-46頁
10. 荒見泰史、「二月八日の出家踰城と敦煌の法会、唱導」、『敦煌写本研究年報』、査読有、第8号、2014年、31-45頁
11. 荒見泰史、「敦煌本『仏説十王経』与唱導」、『中国俗文化研究』、査読有、2014年、178-192頁
12. 荒見泰史、「温室経講経與俗講、唱導」、『出土文献研究視野與方法』、査読有、第五輯、国立政治大学中国文学系編印、2014年、217-244頁
13. 荒見泰史、「敦煌本『仏説諸経雑縁喩因由記』の内容と唱導の展開」、説話文学会編『説話から世界をどう解き明かすのか』笠間書院、査読有、2013年、148-173頁
14. Hiroshi,ARAMI, “The Tun-huang Su-chiang chuang-yen hui-hsiang wen and Transformation Texts”, ACTA ASIATICA,105, THE TOHO GAKKAI, 査読有, 2013, pp.81-100
15. 荒見泰史、「遊僧與芸能」、『敦煌吐魯番研究』第13巻、中華書局、査読有、2013年、79-96頁
16. 荒見泰史、「敦煌講経文類と『東大寺諷誦文稿』よりみた講経に於ける孝子譚の宣唱」、『敦煌写本研究年報』第7号、査読有、2013年、69-90頁

〔学会発表〕（計　13　件）
1．荒見泰史、敦煌本十斎日資料与斎会、儀礼、敦煌吐魯番国際学術研討会、「北京（中国）」、2013 年 8 月 20 日
2．Hiroshi Arami, The Ten Kings Worship and Prosperous Rituals in China During 9th and 10th century、*Religious Performance, City and Country in East Asia*、「イリノイ（アメリカ）」、2013 年 9 月 10 日
3．荒見泰史、温室経講経与俗講、唱導、敦煌文化与唐代文学国際学術研討会、「蘭州（中国）」、2013 年 9 月 13 日
4．荒見泰史、敦煌本《五台山讃文》与念仏法事、斎会、敦煌、吐魯番国際学術研討会、「台南（台湾）」、2013 年 11 月 16 日
5．荒見泰史、法照門徒的念仏法事与《法照伝》的宣唱、第 4 届東亜宗教文献国際研討会、「台北（台湾）」、2014 年 3 月 16 日
6．荒見泰史、韓国東海三和寺水陸斎調査報告、中国俗文化国際研討会、「成都（中国）」、2014 年 7 月 12 日
7．荒見泰史、仏教儀礼の構造と文体、中国中世写本研究 2014 夏期大会、「京都大学（京都府,京都市）」、2014 年 8 月 23 日
8．Hiroshi Arami, The Dunhuang Manuscript of the *Chajiulun* and Comic Theatrical Performances at Buddhist Assemblies, リュブリャナ大学フォーラム・書物とことばの仏教文化史、「リュブリャナ（スロベニア）」、2014 年 8 月 31 日
9．荒見泰史、論中國宗教的特徵及其融合――以景教的讚美歌與淨土讚的關係爲主探討――、第四屆人文化成國際學術研討會、「花蓮（台湾）」、2014 年 10 月 24 日。
10．荒見泰史、九、十世紀中國齋會的隆盛與十王信仰、“重繪中古中國的時代格：知識、信仰與社會的交互視角”國際學術研討會、「上海（中国）」、2014 年 11 月 8 日。
11．荒見泰史、敦煌文獻より見た唐五代の女性を取り巻く社會環境、国際研究集会『東アジアの宗教儀礼－信仰と宗教の往還』、「名古屋大学（愛知県，名古屋市）」、2014 年 12 月 13 日、14 日。
12．荒見泰史、敦煌唱導資料の研究、京都 2015 敦煌吐魯番国際学術研討会、「京都大学（京都府，京都市）」、2015 年 1 月 29 日、30 日。
13．荒見泰史、從密教儀軌的演變來探討中唐期的宗教儀禮、「京都大学（京都府，京都市）、2015 年 11 月 4 日。

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
荒見　泰史（ARAMI，Hiroshi）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：３０３８３１８６

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：